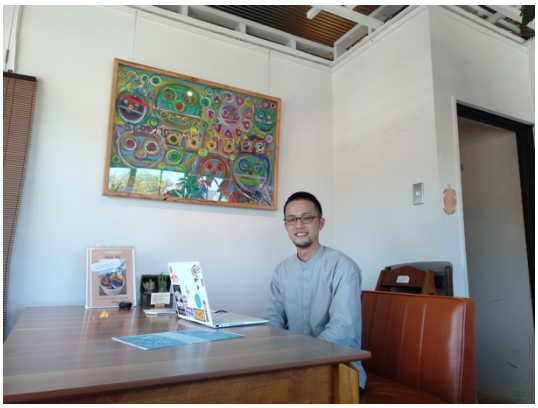
# 岩原勇気さん（特定非営利活動法人 BRAH=art. 理事長）

今回は、大津市の瀬田で活動する「特定非営利活動法人 BRAH=art.（ブラフアート）」理事長の岩原勇気（いわはらゆうき）さんにお話を伺いました。

〔岩原勇気さん プロフィール〕
1981 年、兵庫県生まれ。2003 年、龍谷大学社会学部臨床福祉学科卒業。2004 年、社会福祉法人びわこ学園入職。2014 年、「障がいがあろうとなかろうと好きなこと得意なことを仕事にして精一杯生きる」をテーマに特定非営利活動法人 BRAH=art.設立。
2015 年、隠れ家的おしゃれ居酒屋跡テナントを居抜きのままで、障害者日中一時支援事業所「yafa~」開設。
2017 年、勢多の唐橋東詰めガソリンスタンド跡地に「cafe&gallery spoons」「生活介護事業所 office-cosiki」開設。一般社団法人とこ設立。理事就任。
2019 年、atelier ikkai-sankai 開設。瀬田唐橋まちづくりの会、OtsuLivingLab 等、まちづくり系の企画にリンクワーカーとして従事している。



## ＜設立の経緯＞

***－岩原さんが BRAH=art.を設立された経緯を教えていただけますか。***

元々、社会福祉法人びわこ学園が運営する、大津市立やまびこ総合支援センター内の生活介護事業所「さくらはうす」という通所施設で働いていました。そこには、地域生活をされている重度の障がいがある方たちが通ってこられているのですが、医療的ケアが必要な方や、精神障害や発達障害に対する適切な支援を受けられなかったことで行動障害が強くなってしまった方など、制度の狭間にいる方も通所されていました。そのときに担当していた利用者さんが、今、BRAH=art.の理事にもなっている、西川です。彼女は知的障害に関してはほぼなく、医療的ケアが必要な人です。身体的にはストレッチャー型の車椅子がなければ寝たきりという状態でした。彼女はかわいらしい雑貨が好きで、雑貨屋をやりたいという話をしていたんです。支援に携わる中で、可能性をより広げ

たいという思いが強くなり、また彼女に限らず、いろいろな狭間にいる人たちのためにできることをやりたい、と思うようになりました。ただ、大きい法人で彼女をサポートしながら雑貨屋さんをやるというのは簡単ではないため、そこで、元びわこ学園のスタッフの人などにも関わってもらい、独立して法人を立ち上げました。

**＜スタッフから事業が生まれる＞**

BRAH=art.という名前は、「ブラフマン」と「アートマン」という、インド哲学の言葉からとっています。宇宙の成り立ちと、人ひとりの成り立ちは一緒、という考え方です。そうであるなら、障がいがある人一人の生活を変えることで、社会全体を変えてやろうじゃないか。と逆説的にとらえた造語です。周囲からアート活動をする法人のように思われることもありますが、そこが始まりではありません。

法人がテーマにしているのは「障がいがあろうとなかろうと、好きなことを仕事にして精一杯生きる」ということです。BRAH=art.の事業は、まず最初にやりたいことがあり、それに対してどのような仕組み・制度を使えば可能になるか、という順番で考えています。そこでは、スタッフがやりたいことも、利用者の人がやりたいことも、周囲の人も、全部応援していきたいと思っています。

***－スタッフは何名体制でされているんですか。***

法人全体では、アルバイトも含めると 25 人くらいです。それぞれがいろいろなことをやっているので、統制が取れていないイメージもあるかもしれないのですが、それ自体も許されているような法人なので、いろいろな表現をみんながやっているという感じです。

現在、施設としては、瀬田にカフェ＆ギャラリー「spoons」と生活介護事業所「office-cosiki」を併設し、その従たる事業所として石山寺に「atelier ikkai-sankai」を開設しています。また、日中一時支援事業所として「yafa~」と「agari」、シェアハウスを運営しています。

生活介護事業所「atelier ikkai-sankai」ができたのは、スタッフの中に、かつてアーティストとして活動をしていた人がいたことがきっかけです。本人は、制作していた時期のことを、日常生活に支障をきたすほど、感受性を研ぎ澄まし、自分を追い詰めていたように思う。けれども一方で、そこまでいかないと自分が納得するものは創れなかったと言っています。しかしながら、家族を持ち、子育てをしながらそのような状態でいることは難しく、自分は出来ないながらも、そういう人

を応援したいんだと。さらに話していくと、「滋賀県にはなかなか貸しアトリエみたいなものがないので、アトリエを作りたいんだ」という話が出てきたので、じゃあ作ればいいんじゃないかと立ち上げてみたところ、そこに絵を描きたい人が利用者として集まってきました。

また、カフェ＆ギャラリー「spoons」を立ち上げたのは、滋賀県の食材をより美味しく届けたい、滋賀県内で活動しているアーティストを応援したいという思いからです。BRAH=art.の立ち上げ当初から、マルシェ等への出店で、周辺地域の事業者や、アーティストとの関りが多かったので。最近では、周辺地域の事業者がマルシェとして使用したり、配信ライブのスタジオとして利用される方もおられます。

それと日中一時支援事業所ですが、BRAH=art.の日中一時支援事業所「yafa~」は特殊です。決まっていることは、ドリップ珈琲がのめること。それ以外は何も決まっていません。そうすると利用者さんも、スマートフォンを見て過ごされたりとか、YouTube 動画を作成したりとか、いろいろなことをするようになる。一日中寝ている方もいらっしゃいます。利用者は、これまで引きこもっておられた方や、他の事業所に通っておられる方、一般就労されている方、ほかの事業所でミスマッチを起こされた方など様々です。何も強制されない空間が、自分にまとった鎧を少しずつ脱がせ、素の自分に戻っていかれるというような場所になっているような気がします。

***－一般的な福祉業界の法人と比較して、その成り立ちはとても面白いと思います。ただ、説明をされるときには苦労もあるのでしょうか。***

ある程度共通のイメージを浮かべてもらえる人なら良いのですが、共通のイメージが持てないと、特に福祉業界の人には伝わりづらいですね。僕らの場合は、びわこ学園という日本の障害福祉の成り立ちに影響を与えた法人で仕事をしてきたのと、障害者総合支援法ができていく時期に、先輩方が福祉制度を作っていくのを間近で見てきたので「福祉は作るものだ」ということが頭の中にあったのは大きいと思います。

## ＜アートと表現＞

***－アートとの関わりに関心を持たれた経緯や表現についての考え方についてお聞かせください。***

「さくらはうす」で働いていた時、さをり織りをされている利用者さんがいらっしゃいました。その作品をどうしようかと考えていたときに、一緒に働いていた職員が、草津市にある「咲 sakura 楽（さくら）」という雑貨屋さんにその作品を見てもらったところ、商品として扱ってくれたんですね。それがご縁で、その「咲 sakura 楽」さんが一時期出店していた近江八幡市の尾賀商店（※町家を改装した複合テナント施設）で、京都の NPO 法人スウィングさんとイベントをされる際に、一緒にやらないかと誘っていただきました。さをり織りは素材として「咲 sakura 楽」さんに提供し、それを作品に加工して展示していただいたのですが、これまでに見たことがないほど良い作品ができあがりました。

その時、加工してくれた人たちが、「ハサミを入れていいのか迷った」という話をされたんですね。全体をどう使うかというようなことに、ものすごく配慮をしていただいたのが分かったんですが、それに対して、「いや、ハサミを入れてもらっていいんです」と思ったんです。

障がいがある人の作品だけが、「障害者アート」などの名前で、障害者が作ったものだからといって日の目を見る。そこに何か違和感をすごく感じていました。なぜかと言うと、芸術活動をされている方の中でも、それだけで生計を立てられる方はそういない。日の目を見ずに一生を終える方のほうが多いですよね。障がいのある人だけがピックアップされたような状態で、広がっていくということに違和感がありました。僕も学生の頃に障害者の自立運動に関わっていたので、権利を獲得していく途中段階としては良い取組だと思っています。でも、今の世の中では、そこに世間とのギャップが生まれてしまう印象を持っています。全てにおいて平等な状態、公平な状態にすることで、障がいのある人たちの権利やマイノリティと呼ばれる人たちの権利も本当の意味で保障されると思ったのです。

BRAH=art.では、作品を素材として提供することで、相手の作品として、商品として、売ってもらうということに取り組みたいと思っています。手織りの反物にハサミを入れていただくことで、今までになかったような作品が生まれ、そのことによって、今まで買おうと思わなかった人たちも、単にその服が欲しいという理由から、障がいがある人たちが作った作品に触れられ、それが広がっていく。僕たちはその道を選ぼうと思ったわけです。

一方で、絵画として作品がそのまま世に出ていくようなときも、他のアーティストたちと同じ土俵でやりたいと思います。それが売れず、その人が一生年金だけで食べていくかもしれないですし、生活保護で生きていくかもしれない。でも、それでもいいんじゃないかと思います。自分が思った絵を描き続け、そのまま世に出ずに死んでいったとしても、それがアーティストだと僕は思っているので。

僕は「全ての根源は表現である」ということから始まると思います。びわこ学園は昔から、粘土での造形活動を続けてきました。びわこ学園だけではなく、滋賀県内外のいろいろな人たちが関わって「土と色」展という展覧会もやっています。重度の障がいがある人が粘土を触るとき、最初から作品を作ろうなんて思っていないんです。粘土の感触を確かめて、それを食べたり、それを枕にしたりして気持ちいいと感じたりすることから始まります。その後、支援員などの周りの人が「これ◯◯みたいだね」というような見立てをすると、そこにコミュニケーションが生まれ、表現する

ことの喜びだったり、表現したときの自分の感覚や相手に伝わっていることとの違いなどの経験を積み重ねていきます。例えば、支援員から「リンゴみたいだね」と言われたときに、利用者さんは「リンゴだ」と思って喜びを得ているわけではなく、スタッフが「リンゴみたいだね」ってにこやかになっていることに喜びを得るのではないかと思います。自分が何かを作ったときに、そこにコミュニケーションが発生することの繰り返しですね。

**＜表現を応援する側として＞**

僕は学生のときからバンドをやってきましたが、プロを目指す友人がギターを１日に８時間も練習しているのを見て、僕は絶対そうはなれないと思ったんです。田所友香理さん（※さくらはうす利用者。やまびこ総合支援センターで行われている即興演奏活動「大津ワークショップグループ」のメンバーとして活躍）と出会ったときもそうでした。彼女が全身で音楽を楽しんでいる様子を見たとき、表現することとは何なのかということを学びました。歌を歌って、毎回最後に泣いてしまう利用者さんを見たときも、これが表現だ、アートだと思ったのです。そしてそれは、僕にはできないとも思いました。だからこそ、表現したいこと、やりたいことのある人たちを応援するというスタイルの法人を作りました。

ただ、僕は自分で表現することは諦めたと思っていたんですが、この話をするようになってから、いろいろな方が「それが岩原さんの表現だよね」と言ってくださるんです。それを聞いて、そうかと思いました。自分のやりたいことが仕事になっていなくても、仕事は生きる術として別にやっていたとしても、それがその方の「生きる」という表現なんだなと。

***－アートマネジメントに関わっている方々にとっても、とても心に刺さる話だと思います。表現をする側として関わってきた人たちがアーティストを支える側に回ろうとする時、その人のやりたいことよりも、自分のやりたいことの方に誘導してしまうことも起こり得るし、その人自身、無意識のうちにそうなっていないかと葛藤することもあると思います。岩原さんのお話は、そこへのヒントになると思います。***

アーティストがその活動で稼いでいきたいとき、それをうまくプロデュースしてくれる人と組んで商品化していくことは、全然悪いことではないと思います。もともと日本人には文化芸術活動に対するハードルがあると思っています。バンドをやっている人が舞台をたくさん見に行くかというと、行かないですよね。音楽は聴いても、ライブに行く人がいっぱいいるかというとそうでもない。日本人全体として、日常的にお金を払って文化芸術に触れる人はそれほど多くないと僕は思っ

ています。その中で「障害者の文化芸術活動」となると、さらにハードルが高いと思います。結局、関係者しか観に行かないというのが現状です。

だからこそ、平井堅の後ろを義足のダンサーが踊ったり、パラリンピックが東京から全世界に中継されたりと、健常のアーティストたちと同じ土俵で障がいがある人たちの表現活動が行われ、大衆の目に触れるということは、やり方、見せ方、思想などを置いておいても、すごく大事なことだと思っています。クオリティが高いということにも意義があります。作品に触れた人が「やばい」と思うくらいの感動を与えられるかどうかという、そこが大事だと思います。そういう作品を生み出すためには、うまくプロデュースしてくれる人と組んでいくことが重要でしょう。

ただ一方で、これは高校の時、自分にとって大きな転機になったエピソードなのですが、僕はGreen Dayというバンドが当時大好きだったのですが、彼らが新譜のCDを出したときに、僕はなんかいまいちだなって思ったんです。そのことを友人に話したら、友人は「でも、こいつらはいいと思ってこれを作ったんだから、別にそこは、お前の評価関係ないやん」という感じで言っていたんですね。それを聞いて、確かにそうだと思いました。彼らは、今自分が表現したいことを表現してCDに詰め込んだだけで、それを聴いた僕がどう思うかは関係ないですよね。セールスとして、それが多くの人に受け入れられるかどうかは別です。でも表現している本人としては、「これが良い」と思ってCDに詰め込んだので、ある意味そこで終了ですよね。このことが、「アート」という大きな言葉で閉じ込めたときに、見えなくなってしまいがちだと思います。

あと、これはアイサ（アール・ブリュト　インフォメーション＆サポートセンター）で、子どもたちが参加しているダンスグループの様子を映像で流したときのことなのですが、参加している子の親御さんにダンスのことについて尋ねたら、「いや、そんな大層なことじゃなくて、これは体重を増やさないための取組なんだ」と言うんです。本人たちはリズムに乗って自由に体を動かしている。だから本人たちにとってそれは表現活動ですが、一方の親御さんたちにとってはダイエット。またアイサとしては、舞台芸術の取組として紹介しているという、面白いことが起きていました。

そのことについて、僕は両立していくと思うし、周りの人たちがプロデュースしてあげればいいとも思うのですが、それを「障害者アート」として出していくのか、「アート」として出していくのかには、大きな違いがあると思っています。

最近、会社の玄関などで作品が飾られることも増えましたが、その作品に「障害者アート」と書いてあるとしんどくて、アートとして見れなくなるんです。とても良い作品なのに「障害者アートです」と掲げられていると、僕の中では価値が下がるんです。そうじゃなく、その人が積み重ねてきた、その人自身の表現として素晴らしいと思うわけですよね。それをそのまま出してほしいと思います。アート作品をどう受け取るかはその人次第じゃないですか。「障害者の〇〇」という説明を書く必要があるかどうかということが、僕はこれから先、問われていくんじゃないかと思っています。もちろん、「そうやって世に出した方が売れる」という考えもあると思います。でもそうしたことで、いらない分断が生まれてくるのではないか、逆差別みたいなものが生まれてくるのではないかと思っています。

本当にアーティストとして生きている人たちは、障がいがある人たちが作ったものを、何の垣根もなく受け入れています。だから、変わるべきは福祉関係者だと僕は思っています。「障害者アート」として評価されるところから、「障害者アート」としてではなく、「この方が作ったアート作品」として世に出した上で、それが買われるかどうかがすごく大きなところだと思います。BRAH=art.の活動では、そちら側に舵を切っていきたいです。これが芸術的だ、というような一般化されたイメージではなくて、表現するということの根本的なところまで一旦目線を下げたときに何が生まれるのかというところから、プロデュースができると良いと思います。

## ＜地域で「当たり前にいる」こと＞

特別ではなく、当たり前のように僕らが居る状態を、コミュニティの中で作っていくようにしています。それは、障がいがある人たちと近所の人たちが、当たり前にそこに居て、「配慮はあるけれど、特別ではない」という状態なんですね。その状態を、本当の意味で作らないと広がっていかないと思います。それを啓発活動や運動として行ってしまうと、本当の意味で感じられていない人にとっては、そこに溝ができてしまう。本当の意味で「三方よし」になれるかどうかです。

僕らは瀬田の朝市の運営に関わっていて、出店者の募集やポスター作りなどの事務作業をしているのですが、その作業の一つとして、身体障害があるうちの利用者さんに写真を撮ってもらい、ホームページにアップしています。そうするとそこに役割ができます。それを続けていると、朝市に関わる他の人にとっても当たり前になってきて、「商工会で報告書を作るから、その写真をください」と、僕にではなく、その利用者さんに言ってこられるようになりました。

やり始めてから5年が経ったころの話ですが、その時に、勝ったなと思いました。やっと「配慮はあるけれど特別ではない」状態が朝市の中でできあがったと思ったわけです。相手にとってのWin、僕らにとってのWin、地域にとってのWin。そういったことが、本当の意味でみんなに実感してもらえるようになったのではないかと思います。そして、実感できるものになったということは、それが言葉としてだけではない、ちゃんとした意味で、コミュニティに広がっていくことにもなるのだと思います。

## ＜今後の関心－まちに出ていく表現活動＞

BRAH=art.が参加している大津市自立支援協議会の部会では今、5年後くらいにイナズマロックフェスを超えるようなものをやることを目指そう、という話をしています。また、一緒に参加して

いる、まちかどプロジェクトさん（※演劇活動などにも取り組む障害福祉サービス事業所）は「障害者の舞台ではなくて、もっと一般化されたものを作りたい」というお話をされています。

***－大津市自立支援協議会には文化芸術部会があると聞いていましたが、非常におもしろい話だと思います。そこでのつながりをもとに、これからしてみたい取組はありますか。***

やはり、ハードルを下げる取組をしたいと思います。例えば、ショッピングモールの中で、何年か前に流行ったフラッシュモブのように急にゲリラ的に始まるものだったりとか。チンドン屋じゃないですけれど、近くにいる人たちが見なければ仕方がないような状態を作り出し触れる機会を増やし、そこでお知らせする。そういったところからハードルを下げることも必要ではないかと思います。

僕たちは以前、文化ゾーン（※瀬田周辺にある、県立美術館、県立図書館等を核とした文化公園）というところで、プロのアーティストたちがいきなり楽器を持って現れるイベントをやりました。そこら中に楽器が散らばっていて、そこに来た子どもたちも巻き込んで、一緒に演奏していくわけです。表現したい人、あるいは表現したくない人など、いろいろな人がいるわけですが、まずは接点となる機会を増やすことができたらいいと思います。

**＜音楽活動をする施設づくりに向けて＞**

以前、大津市の石山にある銭湯で、音楽ライブとライブペインティングのイベントをしました。男湯で音楽ライブを、女湯でライブペインティングをしたのですが、女湯では他のアーティストが壁に直接絵の具で描いている中、自閉症の利用者さんが自分の腕に色を塗っていたんです。すると、子どもたちが途中から参加し、描いているうちにその利用者さんの腕に塗り始めたんです。銭湯の男湯と女湯の壁って、上の方は開いているじゃないですか。だから、ライブの音も聞こえますよね。そこに、腕に色を塗っている利用者さんが共鳴していくんです。そこでセッションが生まれるんです。

このようなイベントをしたこともあり、僕らはいずれ、音楽活動の施設を作りたいと思っています。そこは、表現の根本の部分を感じてもらえるような場所にしたいと思っています。音楽を感じているだけの利用者さんや、それを全身で表現する利用者さんがいるところに、プロのアーティストたちが休憩をしにくる。そんな場所を作りたいです。プロのアーティストも、いろいろと大変なことを抱えていますよね。ですので、そんなときに、ふと、素でいられるというか、自分が根源的に何を表現したいのかということに立ち戻れるような場所を作りたいというイメージです。

***－アーティストが地域に滞在するアーティスト・イン・レジデンスでは「サバティカル」という考え方があります。それまで頑張って活動してきたアーティストが、休暇をとって充電できるようなプログラムのことです。訪れるアーティストと利用者さんがフラットな関係で、アーティストは休憩してもいいし、音楽をやりたいと思ったらやればいい、という関係性の場となれば、「サバティカル」とも重なっていく部分がありそうですね。***

それは、そこにいる利用者さんたちの仕事にもなっていくと思います。対価が発生するしないではなくて、その人たちの表現が誰かの心を癒したり、そのために誰かが訪れるようになるとしたら、それはもう仕事なんですよね。

**＜地域をむすぶ＞**

僕はアイディアマンではありません。アイディアは、実はスタッフだったり、利用者だったり、地域の人などが運んできてくれて、それをくっつけているだけなんです。理事たちと、ああでもないこうでもないと事業の相談をしていますが、新しいものを作っているように見えて、全部組み合わせでしかない。でも頭を柔らかくして「これとこれをくっつけたら、新しく見えるよね」とか、そういう風に事業を作っていくんです。

最近では、障がいがある人たちの活動を通して子どもの育つ環境支援に取り組んでいます。子どもの未来を作るというか、未来を作っていく子どもたちがここに住み続けたい、ここで仕事をしたいと思える街を作る取組です。そのために、街の人たちとリンクを張っていくのです。

まず、「office-cosiki」では身体障害がある利用者が、夕方、子どもたちの学習支援の仕事をしています。先日のイベントでは、子ども達と近所の瀬田川観光船組合さんの事業である、網船体験をし、瀬田川の産業を知りました。spoons では、瀬田町漁業の皆さんが漁で獲たシジミや、朝市で知り合った佃煮やさんの琵琶湖で獲れた魚の佃煮をランチに使い、より美味しく地域に発信しています。

BRAH＝art.の取り組みが瀬田地域の過去と現在、未来をつなぎ、子ども達がこの地域に愛着を持って成長していく安心感につながっていけばいいなあと思っています。

**＜コロナ禍を経ての経営＞**

***－最後にコロナ禍でのことなど、課題に思われる点があればお聞かせください。***

実はうちの場合、結果的にはコロナの時期だからこそ BRAH=art.という名前がより広がったということもあるかと思います。

元々、全国で個展をやろうと思っていたのですが、それができなくなりました。代わりにどうするかを考えたとき、普段お付き合いをしている業者さんらも大変そうなので、応援となるような冊子を作ろうとしたのですが、出版社と相談した結果、流通させようということになり、書籍の出版に至りました。

また滋賀県内でいいますと、「BUY LOCAL」というキャッチフレーズで、地域の飲食店を支援しようという動きが広まりました。そのときに僕たちのお店も組み込んでいただいたのですが、僕たちは福祉事業もあり、飲食業だけで採算を取ってるわけではないので、まあなんとかなるんですね。じゃあ、僕たちも応援しようということで、「BUY LOCAL BIWAKO Delivery Otsu」という、近所の飲食店の食事を、利用者さんと一緒に配達するというサービスを始めました。「office-cosiki」は生活介護事業所なので、コロナ禍でも家にいることのできない利用者さんはおられ、だから施設に来ないわけにはいきません。ですが、密にすることもできません。そこで、ドライブをしようという発想になり、だったらその車でデリバリーができるということで、利用者さんと一緒に食事を配るということをやりました。

財源はもちろん十分なわけではないですが、本当の意味で Win-Win の関係になれるように、地域に全力に返していこうと思います。社会的な課題やニーズに対して、マッチングしてやれることはたくさんあると思います。

インタビュー・編集：文化芸術による共生社会づくりコーディネーター　藤原顕太

---

**滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト“SANPOh”について**

SANPOh は、文化芸術活動と、福祉・教育・国際交流などの地域社会の様々な営みが出会い、つながることによって生まれる多様な価値や豊かさに着目し、このような出会いの場を滋賀県内各地に増やしていくプロジェクトです。

市町の文化ホールと地域、住民がつながるためのモデルとなる事業や、社会と文化芸術の「つなぎ手」となる人たちをサポートする取組を行っています。

https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/bunakasports/bunkageizyutsu/321540.html